けた朝鮮半島からの50 **汕戸幕府が「よしみ(信)をかわす(通)」の意で、二百数十年招聘し続** 『朝鮮通信使』を今日の日韓の新しい交流プロジェクトとして展開し 0 人規模の文化使節団『朝鮮通信使』。この

ジウムにも参加し、再び牛窓、備前、室津、神戸、大阪へ。そしてあいち ともあり、とりわけ瀬戸内海の通信史ゆかりの街は丁寧に巡った。下 船旅。瀬戸内国際芸術祭201 20数日間キャラ 2010年8月6日、日韓の、主にクリエイター ていくのが『続・朝鮮通信使』だ。 リエンナーレを経て横浜へ。その後も新潟県越後妻有まで脚をの 、そして博多へ。下関からは船をチャ 、現代版の衣装を身にまとい、オ 関、下蒲刈島、今治、鞆の浦。そして瀬戸 バンを行なった。ソウ 0の正式参加プロジェクトだったと ルから釜山へ、釜山から対馬 ル な旗と音楽を掲げて し、大阪まで14日間の からなるクルー約 のシンポ

あった草梁倭館(日本人居留地)を再現した。会期中は、この草梁倭館 た「新・港村」というプロジェクト 開館した「朝鮮通信使博物館」のお祝いや、朝鮮通信使祭りのパレード ンギドウ等に誕生した新しいアー 朝鮮通信使研究会」のメンバー15名程で行なった。インチョンやキョ た際に残留した武士の19代目の子孫にあたる人たちの日本人村に ,想外な出会いがある。例えばテグの郊 11年夏は横浜トリエンナ 心に、日韓関係の多彩なイベン 年春(4月28日 した。韓国国内はゆかり 00歳になろうという老夫妻は日本語を話されていた。 ムが活用するスタジオ空間として、江戸時代、釜山に ウルサン〜 月8日)は韓国国内を巡るツア ・釜山と東周りで南下。釜山では新しく のある街は少ないが、巡ってみると トスペースを巡りながら、ソウル レ 2 0 中で、数多くの韓国チー が連日開催された。 外の村では、加藤清正が出兵 11と特別連携して開催し ムを招聘 を「続

する。そして2013年冬から大阪から東京へ巡る予定だ。 国から招き、サンドラムという日本の打楽器隊とコラボレ ているので、取り急ぎ9月13日~ 秋は横浜と越後妻有でア 18日までノリダンの打楽器隊を韓 フェスティ ルが開催され ーショ

的に訪ねてい けを巡るわけではない。新しい を総動員し、独自の方法で異国の客人を迎え入れ、信(よしみ)を通 で、私たち 続・朝鮮通信使と名付けたように、決して江戸時代の縁のある場所だ も、「独自性のある豊かな街の連鎖」を垣間みることができた。また たという史実を浮上させる。実際20日間ばかりの20 島という国家間の外交プログラムが、地方都市のホスピタリテ 央集権的な国家ではなく、地方自治の連合政権、都市の時代だっ す)。このことは既に言及されているように、江戸 ーで支えられていた点だ。各都市(各藩)が人的・文化的な財産 「朝鮮通信使」に興味を ぐことになる。 のような新しい施設や動きがある場所を積極 ネット った理由のひとつは、日本と朝 クを築くことが目的なの 10年の旅で 時代中期以降

0

宇部

2010.8/12 下関 시모노세키/6hi

(船チャーター)

上関

() 카미노세체

続·朝鮮通信使 2011春 韓国

日程 2011.4/28-5/8 ソウル〜釜山

2011 5/2 アンドン/安東 안동/Andong

> 2011 5/4 キョンジュ/慶州 경주/Gyeongju

> > 011 5/5

울산/Ulsar

プサン/釜山

対馬

壱岐 이키/lki

プルサン/蔚山

テグ/大邱

を支える経済の仕組み、等など。これらの課題を焦らないで、じっ 都市との協働関係の構築、法的・感情的なない さてこのプロジェ それを支えるきめ細やか 人の選考方法、ソウル と突破していきたい。そのためにも強い意志を持ち続けることと われるクルー 年後には、当時のスケー いと考えて 年毎に10倍のスケー 3年度は再び規模をあげて瀬戸内海を中心にプログラムを組 2年度はリ を実現したい。もちろんハードルは数々ある。5 ~横浜~ ル500人規模の招聘と4 ルに上げていきたいと考えている。そして 一体どこまでいくのか? も兼ねたイ 妻有の宿泊などを受け入れてく ロダク のクリ シ 2 $0 \\ 0$ 3 0 ン。翌年 人とも 全体 亡 n 0 0 0

2011.4/29 キョンギドウ/京畿道

2011. 1 インチョン/ 1 り巻/Incheen,

2011.4/28 -5/1 2010.8/6 **クウル**

서울/Seoul



ス LOOP(ソウル)、オルタナティブスペース Bandee(釜山)、オープンスペース Bae(釜

山)、noridan (ソウル)、TETSUSON韓国チームなど。

続·朝鮮通信使 속•조선 통신사

2012 東海道·秋



今年度の続・朝鮮通信使は、諸事情により夏ツアーを断念し、秋ツアーから開始。 2012年9月12日にラテン系の打楽器チーム、サンドラムが来浜、関内外地区をパ レードします。13日には、韓国から廃材を使って楽器を作り、パレード行うノリダンと いうチームを招聘しました。ともに14~16時ごろ、BankART Studio NYK、YCC、ヨ ンカイ、横浜市庁舎、吉田町、野毛、黄金町バザール、象の鼻テラス、ハンマーヘッ ドスタジオ等を巡ります。

16日にはノリダンは舞台を十日町に移し、大地の芸術祭の各会場を巡ります。17日 には、このふたつの打楽器隊15名とアーティストたちからなる続・朝鮮通信使クルー が、大地の芸術祭のファイナルイベントに参加します。

2012年9月

- 12日(水) SUNDRUM (ラテン系打楽器隊 /7名) 横浜パレード 14:00-16:00
- 14日(金) noridan (韓国/打楽器隊/8名) 横浜パレード 14:00-16:00
- 16日(土) noridan (韓国/打楽器隊/8名) 越後妻有パレード
- 17日(日) noridan (韓国/打楽器隊/8名) + SUNDRUM (ラテン系打楽器隊/7名) +続・朝鮮通信使クルー(約15名)総勢約35名 越後妻有アートトリエンナーレ2012ファイナル参加/まつだい「農舞台」

お問い合わせ:BankART1929

TEL:045-663-2812 tongshinsa@bankart1929.com http://www.bankart1929.com

続·朝鮮通信使 2012 東海道·冬

2013年1月中旬から大阪を起点に東海道を巡ります。江戸時代の縁のある都市はもち ろんのこと、新たに関係するアートスペース等も訪ねます。

noridan ノリダン

noridanは2004年に韓国で誕生し、使えなくなった資材な どを再利用して楽器に変え、パフォーマンスやワークショッ プ事業をする社会的企業。韓国のみならず、アジアや世 界各国で活動を展開。団員(社員)は韓国の青年達が中心 で、そのパフォーマンスはこれまでたくさんの人々を魅了 している。※noridanの「nori」は韓国語で「遊び」の意、直 訳すると遊び団



SUNDRUM サンドラム

2010年結成。旅とアフリカを愛する打楽器奏者Ats-Jの呼び かけにより、4人の太鼓族、エリヲ、MAO (Indas&Rocks)、 ワディ(センカヲス)が集まる。その後、田中慶一(Kinadom ☆Afrocks,Zungooca) が加入し、ボーカルの善戝和也(大 きな鯨)、ツダユキコ(つむぎね)、ダンサーの石本華江(妄人 文明)、大島菜央(つむぎね)、亀田欣昌(妄人文明)が加わ る。次世代型原始人の森の奥からきこえるドラムと歌とダン スのセレモニー。



A Contemporary Sequel for the Joseon - Korean Diplomatic Expeditions

The Tokugawa Shogunate invited some 500 diplomats and cultural figures from Korea over a 200 year-period during the Edo era (1603-1868) This project- a contemporary sequel to the Joseon expeditions - was launched with the intention of renewing cultural exchange programs between Japan and Korea. Starting from Seoul on August 6, 2010 with a fanfare of period music and flag waving, a crew of 20 contemporary emissaries, consisting principally of artists wearing modern versions of traditional clothing, set out to retrace the steps of their predecessors visiting Busan, Tsushima and Hakata along the way. Boarding a charter boat in Shimonoseki they undertook a 14day sea voyage to Osaka through Japan's Inland Sea, en route docking at the various events of the Setouchi International Arts Festival and historical sites connected with earlier missions. They also visited the Aichi Triennale before continuing on their way to Yokohama. Thereafter they set out for Tsumari in Niigata prefecture. Between April 28 and May 8th 2011, fifteen members of the Joseon Study group undertook a tour within Korea, taking in the new art spaces in Incheon and Gveonggi-do and various historically linked sites in the south and east of the Korean peninsula - Andong, Seoul, Ulsan, Gyeongju and Daegu. While in Busan they participated in celebrations to mark the opening of Joseon Tongsinsa Museum as well as join in the Joseon Tongsinsa festival street parade. Despite few visibly direct links to this period in Korea there were however unexpected discoveries: In a village on the outskirts of Daegu they met direct descendants of the samurai Kato Kivomasa's expeditionary forces. An elderly lady on the cusp of a hundred still spoke Japanese.

The 2011 Yokohama Triennale saw the participation of Korean groups and artists in the Shin Minato Mura project. We recreated a replica of Busan's Japanese settlement during the Edo era. The venue regularly hosted many of events linked to Japan and Korea. BankART has been principally interested in this Joseon project because of the opportunities it offers to broaden the cultural exchanges between individual communities in both nations. Each participating city and group mobilises their individual and cultural assets so as to welcome in their own particular manner their overseas quests, thus creating the basis for continuing and mutual exchanges. In stark contrast to the idea of a centralised state prevalent after the late Edo period, we are more interested in creating links with autonomous regional authorities - heralding as such the age of the autonomous city.

Even during this brief 20-day voyage we could catch a glimpse of the nascent links between such independent minded and affluent cities. The question remains as to how to proceed with the project. The initial two years - between 2010 -12 - served as a preparatory phase. In 2012, we will concentrate on the Tokaido section of the route. Our plan for 2013 is to revisit the Seto Inland Sea with the ultimate aim of increasing the scale of the project tenfold every three years. Over a period of nine years, we would like to see number of participants rise to the then 500 Korean delegation accompanied with the crew of almost 4,000 people. Notwithstanding the numerous logistical obstacles - selection procedures, accommodation in Tsumari, Yokohama and Seoul, funding and the various legal and social hurdles - we are determined to carefully plot the route ahead without racing into the challenges and continue with our rigorous day-to-day activates and planning.